

【(5) 発問や指示・説明】

⑤「児童生徒の注意を引き付ける言葉掛けをしている」

《つまずきの背景》

- A 刺激の影響の受けやすさ、H 刺激の選択の困難さ、M 自己コントロールの困難さ、
N 注意の持続の困難さ

《解説》

発問や指示・説明を行う際には、まず、子どもが聞く体勢になっているかどうか確認することが大切です。教師に注意が向いていない場合には、注意喚起を行ってから言葉を掛ける必要があります。また、関連した身近な話題を取り上げたり、次に何をするか予告をしたりすることで子どもの注意を引き付けるようにします。

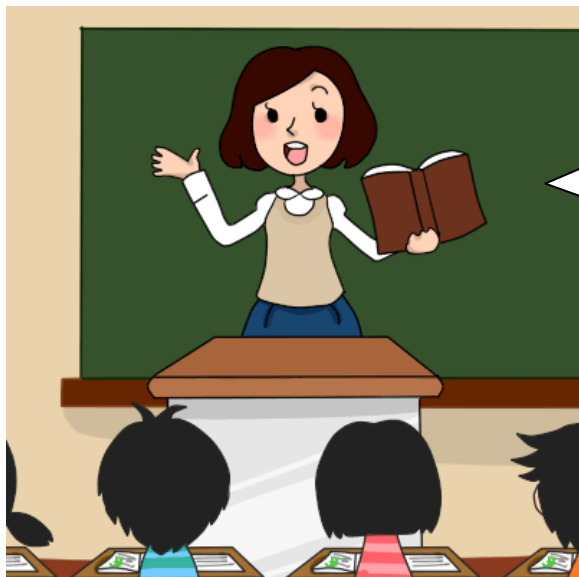
学級の中に、刺激の影響を受けやすい子どもや注意の持続が困難な子どもがいる場合には、聞く体勢になってから言葉を掛ける配慮が必要です。「今から〇〇の説明をします」などと前置きをすることで集中を促す支援も有効です。言葉での促しで不十分な場合は、体の動きを交えるなど視覚に訴えることや、そばに行って肩に触れるなどの伝わりやすい方法を工夫します。

口頭での発問や指示・説明に加えて視覚的な情報を提示すると、より注意を引き付けることにつながります。

【工夫点】

- ・問題の中で子どもの名前を使ったり身近な話に置き換えて発問したりする。(小中高 工夫例 44)
- ・「質問です」「これからしてもらうことを言います」などと予告してから発問や指示を出す。(小中高)
- ・教師の方を向くまで声を出さずに待ち、向いたのを確認して話し始めるようにする。(小中高)
- ・活動する内容を目で見ても分かるように提示しておく。(小中高)

◆工夫例 44「問題の中で子どもの名前を使ったり身近な話に置き換えて発問したりする」



《小学校》

算数の文章題や国語の話の中で、学級にいる子どもの名前を使ったり、子どもが書いた日記の中に出てきた内容を用いたりすることで、子どもの注意を引き付けることができます。それらの工夫は、多くの子どもの興味付けを図ることにつながるとともに、文章が示している状況を把握しやすくなるという利点があります。